



日本語の格と語順の関係とその史的変化

著者	柳田 優子
発行年	2010
その他のタイトル	Alignment and word order in the history of Japanese
URL	http://hdl.handle.net/2241/107782

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：研究基盤 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520327

研究課題名（和文）日本語の格と語順の関係とその史的变化

研究課題名（英文）Alignment and word order in the history of Japanese

研究代表者

柳田 優子 (YANAGIDA YUKO)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：20243818

研究成果の概要（和文）：

本研究では上代語資料を中心に格助詞の分布、人称代名詞の分布、他動詞文の項の語順について調査し、上代日本語は類型学的に「活格類型」に共通する形態的、統語的特徴があることを示した。また、日本語史における変化を活格型から対格型への変化と捉え、生成文法理論の枠組みで格システムの変化について理論的仮説を提示した。さらに、上代から近世までの代名詞の資料調査を行い、日本語史における代名詞の通時変化を反文法化(degrammaticalization)と提案し、理論的観点から分析を行った。

研究成果の概要（英文）：

Based on an extensive survey of Old Japanese (OJ) corpus, this study has examined the distribution of case particles and personal pronouns and the order of arguments in transitive clauses. From a typological perspective, OJ has the morphological and syntactic characteristics of active languages. I have proposed a formal analysis of the historical change from active alignment to accusative alignment. This study has also examined the pronominal system in OJ through early Modern Japanese, providing a formal analysis of changes in the pronominal system during the course of the history of Japanese. I argue that this shift involves what is known as degrammaticalization.

交付決定額

(金額単位：円)			
	直接経費	間接経費	合 計
平成 19 年度	600,000	180,000	780,000
平成 20 年度	100,000	30,000	130,000
平成 21 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総 計	1200,000	360,000	1560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・統語論

キーワード：活格、能格、対格、代名詞、語順、名詞化

1. 研究開始当初の背景

申請者は Yanagida (2006) で、上代日本語には連体節を含む従属節、また係結び構文など

の連体形終止節で、特異な語順の制約があることを示した。他動詞文において、主語と目的語が明示的に現れ、目的語が「ヲ」で表示される場合、語順は OSV で現れる。一方、目的語が無助詞の場合は SOV 語順で現れる。OV 語順に現れる無助詞目的語は動詞に編入される、いわゆる派生自動詞であると提案した (柳田 2007 参照)。

基本語順が SOV 言語では scrambling (かきまぜ構文) という随意移動は存在するが、OSV を基本として現れる言語は非常に少ない。Hasplemuth et al (2005) は典型的に OSV を基本とする言語を 4 つ上げている。Whitman (2008) はその中の Warao と Tobati の語順に関しては OSV 語順である証拠に乏しいと指摘している。Nadëb、Wik Ngathana は能格言語である。また、Dyirbal (Dixon 1994)、Vafsi (Haig 2008) など、分裂能格言語でも対格型は SOV、能格型は OSV 語順で現れる。このことから、OSV 語順はいずれも、能格型に現れ、非対格言語 (活格型を含む) の特徴と思われる。能格言語では移動の制約など統語的に自動詞主語 S と目的語 O が同じ振る舞いをする言語が多い。目的語が主語に先行して現れるという上代日本語の特徴は「非対格型」言語の統語制約によるものであると思われる。

2. 研究の目的

上代日本語は非対格型言語であり、歴史的に非対格型から対格型に格システムが変化したという仮説を立て、以下の 3 つの観点からその実証研究を行う。

(1) 非対格言語の共時的研究

活格言語は非常に複雑で多様な文法的特徴を示すため、現在に至るまで研究者の間で共通理解が得られているとはいいがたい。そこで、本研究では、マヤやグアラニなどの活格言語の調査を行い、典型的、理論的側面から非対格型言語の共時的特徴を調査する。また非対格型言語の格システムの分裂がどのような統語的条件で起こるかを調査する。

(2) 格システムの変化の通時的研究

Klimov (1977) をはじめ、多くの研究者により、言語は非対格型から対格型へ、また対格型から非対格型へ変化することが知られている。言語変化の観点から歴史資料の存在する、インド・イラン語族の資料調査をととして格システムの変化がどのようなメカニズムで起こるかを検討する。また生成文法理論の枠組みを用いて、格システムの変化の理論化を試みる。

(3) 代名詞体系の変化に関する研究

典型的視点にたち、上代日本語から近世日本語の代名詞体系について詳細に調査し、生成文法の枠組みで代名詞体系の変化に関して理論化を試みる。

3. 研究の方法

(1) 本研究の研究協力者であるコーネル大学 John Whitman 教授の協力を得て、コーネル大学にて、グアラニ語話者とのフィールドワークを行う。また、非対格型言語の資料収集を行う。

(2) 典型的な研究から得た一般化をもとに、電子データベースなどを使用して、上代日本語から近世日本語までの格システム、語順、代名詞に関して広範な調査を行う。

(3) 研究成果を国内外の学会、ワークショップ、雑誌等で発表する。

4. 研究成果

(1) 非対格言語の共時的特徴

言語は格システムの観点から典型的に 1) 能格型、2) 活格型、3) 対格型の 3 つの類型に分類される。非対格型言語では他動詞の主語 (A) は能格 (あるいは活格) で現れ、自動詞主語 (S) と他動詞目的語 (O) は絶対格 (多くは無表示) で現れる。また多くの研究により、非対格型言語では特有の A'-移動の制約がかかることが指摘されている (Aldridge 2004 参照)。S/O は疑問文や関係代名詞節で A'-移動が可能であるが、他動詞主語 (A) は主語位置から移動しない。

活格型は自動詞分裂 (split intransitivity) をもつ点で能格言語と異なる。これまで、生成文法理論の枠組みでは、活格型は能格型の一形態とする見方が一般的であった (Bittner and Hale 1996 など)。活格言語は能格言語と同様に格の分裂が起こり、分裂は Silverstein (1976) の名詞階層に対して含意的普遍性を示す (Yanagida and Whitman 2009)。ある言語で活格が有生名詞に現れれば、その言語では、それより階層の高い人間 (+human)、また代名詞は活格で表示される。しかし、能格における含意的普遍性は活格言語と逆向きである。能格の分布はある名詞に能格が現れるとそれより階層の低い名詞は能格で表示される (Dixon 1994 参照)。

こうした点をふまえて本研究では、活格類型は基本的に能格類型とは異なる類型であると提案した。また、活格は統語的に外項

主語位置(vP)に現れ、その位置で基底生成され移動しない。一方、能格は外項主語位置から移動して表層主語位置である Spec(TP)まで移動する言語も存在する。さらに、能格、活格は共に対格型の主格主語と異なり、内在格(inherent case)である点など、理論的枠組みを用いて、活格言語の一般化を試みた。

上代日本語の「ガ」は現代語と異なり、Silverstein (1978)の名詞階層を反映し、階層の高い名詞ほど「ガ」が義務的に現れ、階層の低い名詞は無助詞あるいは「ノ」で表示される。また動作動詞(active verb)の主語は「ガ」で表示され、非動作動詞(inactive)の主語は無助詞かあるいは「ノ」で表示される。こうした観点から「ガ」は活格であり、上代示した上代日本語の語順の特異性も活格言語の特徴と位置づけ、その実証研究を行った。

(2)格システムの変化の通時的研究

① 活格型から対格型への変化

日本語における格システムの変化とインド・イラン語派の非対格型から対格型への変化を比較し、格システムの変化を生成文法理論の枠組みで分析した。(Yanagida and Whitman 2010)。

② 格システムの再建

典型的一般化という観点から日本語史における文法再建 (syntactic reconstruction) という新たな領域の可能性について研究をすすめた。日本語は朝鮮語、満州語、蒙古語など、いわゆるアルタイ系諸語に親近な文法構造をもっていると言われている。しかし、インド・ヨーロッパ語族のような、比較言語学的アプローチから日本語の再建を行うことはむずかしく、日本語では、内部資料による内的再建が行われてきた。しかし、内的再建は主として音韻史の領域に限られている。一方、海外の研究では Lightfoot (1977)以降、類型論、生成文法理論の領域で、文法再建に関して多くの議論が行われてきた。本研究では Gildea (2000)、Kaufman (2007)、などが提案した「名詞化仮説 ‘Nominalist Hypothesis’」の枠組みをもちいて、上代日本語の活格システムは歴史的にコピュラを含む名詞化に起源があると提案した(Yanagida 2009, 2010)。

(3)代名詞体系の変化に関する研究

上代日本語はまた代名詞体系においても現代語とは典型的に異なる体系をもつ。現代日本語には文法的に名詞とはっきり区別される代名詞がなく、文体や社会的立場によって様々な語が人称代名詞として使える。本研究

では、上代日本語には Cardinaletti and Starke (1999)がロマンス語で示した「強形代名詞」「弱形代名詞」「接語代名詞」に対応する3分類の代名詞が存在することを示した(Whitman 柳田 2009, Yanagida 2009, 2010)。上代から近世の資料を詳細に調査し、この3分類の代名詞体系の消失を反文法化(Degrammaticalization)と提案し、その理論的なメカニズムについて研究をすすめた(Yanagida 2010)。

本研究では、上代日本語の共時的事実、また日本語史における文法変化を類型論、生成文法理論の枠組みで実証的な研究を行い、その成果を国内外の学会、あるいは論文で発表した。日本語の歴史変化を理論的視点、また類型的視点から研究する取り組みは今まで国語学領域では行われていない為に、本研究の成果の意義は大きいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- 1) Yanagida, Yuko ‘Reanalysis of Pronouns as Demonstratives: A Case of Degrammaticalization’, *English Linguistics* Vol. 27 (2010 出版確定) 査読有
- 2) Cho Sundai, John Whitman and Yuko Yanagida ‘Multiple Focus Clefts in Japanese and Korean’, *Proceedings of the Chicago Linguistic Society* Vol. 44. 61-77 (2010). 査読有
- 3) Yanagida, Yuko and John Whitman ‘Alignment and Word Order in Old Japanese’ *Journal of East Asian Linguistics*, Vol. 18, 101-144 (2009). 査読有
- 4) Yanagida, Yuko, ‘Miyagawa’s (1989) Exceptions: An Ergative Analysis’, *MIT Working Papers in Linguistics* Vol 55. 265-276 (2007). 査読有

[学会発表] (計 6 件)

- 1) Yanagida, Yuko, ‘Alignment and nominalization in Old Japanese’ *The 19th International Conference on Historical Linguistics*, Radboud University, Nijmegen, the Netherlands, August 14, 2009.
- 2) Yanagida, Yuko, and John Whitman ‘The Formal Syntax of Alignment Change: the Case of Old Japanese’, The 11th Diachronic Generative Syntax Conference, University of Campinas, Brazil, July 22, 2009 (with John Whitman).
- 3) 柳田優子「上代日本語の移動構文におけ

る歴史的起源一類型論的視点から」第 10 回
日本語文法学会招待発表, 学習院女子大学,
2009 年 10 月 25 日

4) 柳田優子「連用形・終止形とその統語的
再建」第 138 回日本言語学会ワークショップ,
神田外語大学, 2009 年 6 月 20 日

5) 柳田優子「代名詞体系と活格類型一言語
変化の観点から」第 81 回日本英文学会シン
ポジウム, 東京大学, 2009 年 5 月 30 日

6) 柳田優子「上代語と活格類型」第 22 回
日本エドワード・サビア協会, 筑波大学,
2007 年 10 月 27 日

〔図書〕(計 4 件)

1) Yanagida, Yuko, Alignment and
Nominalization: The Case of Old Japanese,
Historical Linguistics, John Benjamins
(2011 出版確定)

2) Yanagida, Yuko and John Whitman, The
Formal Syntax of Alignment Change,
Diachronic Syntax: Parameter Theory and
Dynamics of Change, Oxford University
Press (2011 出版確定)

3) Whitman, John, 柳田優子「人称と活格類
型一上代日本語の代名詞体系の観点から」
『ウチとソトの言語学』pp. 175-214 坪本篤
朗、早瀬尚子、和田尚明編開拓社(2009)

4) 柳田優子「上代日本語の能格性について」
『日本語の主文現象』pp147-188 長谷川信子
編ひつじ書房 (2007)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳田 優子 (YANAGIDA YUKO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号: 20243818

(2) 研究協力者

Whitman, John
コーネル大学・言語学科・教授